

新四国相馬霊場八十八ヶ所お遍路

ぽっくり観音と稲コース

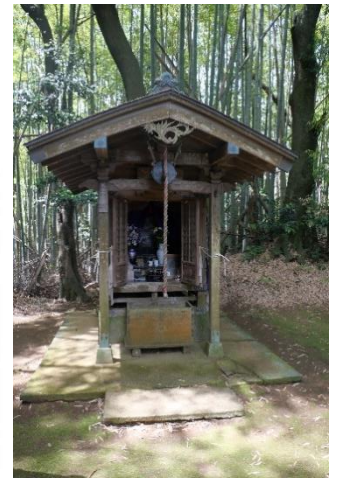


<http://88souma.com/>

1967年12月23日常磐線快速車両は、新型エメラルドグリーン色の103系10両編成となり取手駅で発車記念式典が行われました。1番ホームの103系と写真手前には茶色のゲタ電が停車しています。常総線のレールが国鉄に接続されていて、四ツ谷跨線橋は現在より北側に位置しています。尚、キリンビール取手工場は3年後に出来ました。

取手の有名病院でした今は無き植竹胃腸科病院や片倉紡績取手工場、台宿通り角のケーキ屋不二家が映っています。

昭和 58 年の白山前商店街



しょうじんぐ
生身供のお大師様の御膳
と稲七霊場第 57 番札所

膳の大きさ 20cm×20cm 程



「福引」が行われ、人々の服装から「師走」と判断しました。福引で自転車がもらえた思い出が蘇ります。左側の商店に「くらもち」と看板が見えます、此処に「白山神社」があった様ですが現在は弘経寺境内の山門脇に移されています。白山前商店街は、白山神社と金刀比羅神社の 2 社詣の人々が発展させた通りです。しかし、大型スーパーマーケットの進出により個人商店は激減してしまいました。そのスーパーは「儲からないから店舗撤退」、残された地域住人は何処へ買物に、無責任なスーパーに翻弄された世代です…。

関東三弘経寺、取手大鹿山弘経寺、水海道の飯沼天樹院弘経寺、結城の弘経寺の 3ヶ寺をいいます。

家康の孫娘千姫が居た飯沼弘経寺、天樹院は千姫の院号で結城も寿亀山天樹院です。芝増上寺了学 17 代上任は、元大鹿山弘経寺の僧でした。更に、関宿にも弘経寺がありましたが家康の命で天機山傳通院光岳寺と改称しています。



飯沼弘経寺の千姫祭り行列



結城は家康の次男松平秀康の開基

取手弘経寺
の御朱印
書置きのみ

【注目日付】
毎月 21 日は
大師日です。

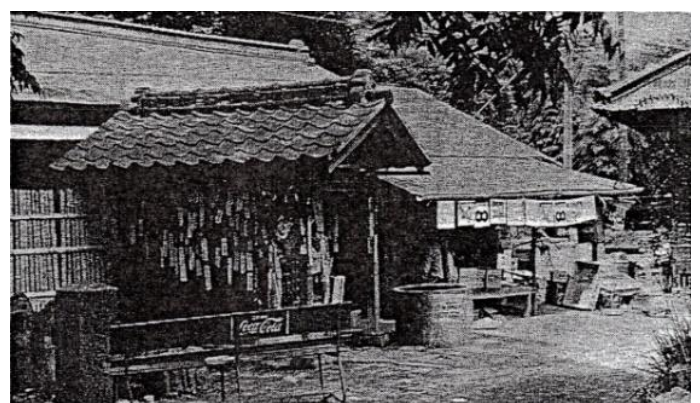


稲七霊場

「稲(いな)」には、個人所有の六札所の霊場と、稲集落で保護管理している第 40 番の七つの霊場が現存します。

また、高井十郎直徳(なおりの)の居城「稲城」がありました、「雁金山の合戦」で大鹿城主の救出と仇討ちで登場する取手では、英雄的城主でした。

昭和時代の第 40 番札所



お遍路コース地図、後半

ゆめみ野駅東口で12:30頃解散予定です。行程約7.3km



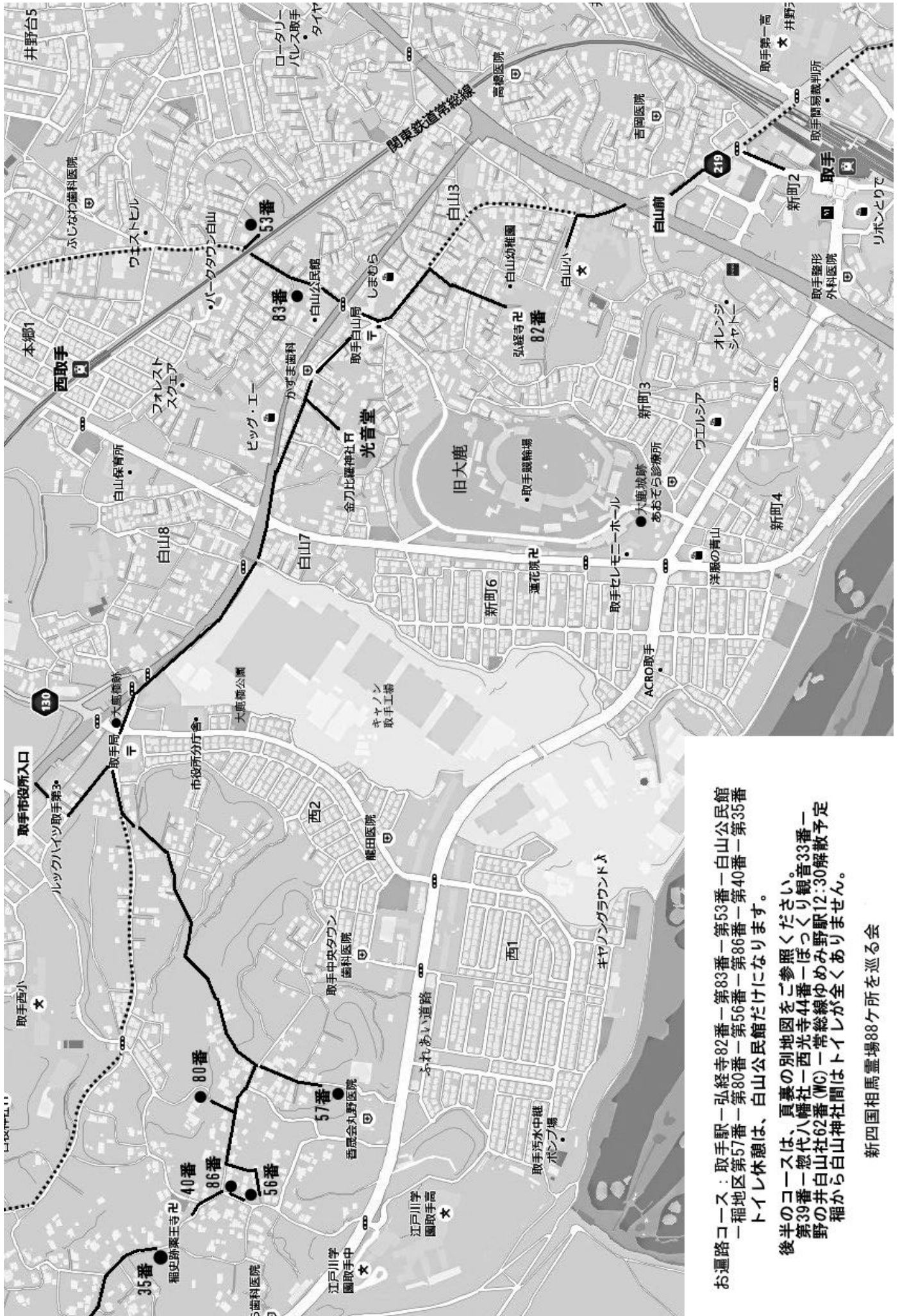
実線がお遍路コースです。点線は「佐倉道」で、江戸時代佐倉藩の領地であった守谷や筑波小田への幹線道です。又取手の渡しではなく小堀の渡しを使っていました、佐倉街道が既存していた為「佐倉道」と云った様です。

また、昭和時代迄「守谷道」とも呼ばれていました。稲の池袋で合流しますが、谷戸を迂回するように道が選ばれていた為です。合流地点の取手寄りの取手郵便局辺りは、大きな谷戸に川が流れていた為迂回するしかなく、明治初め頃なのか「大鹿橋」が出来てから、遠回りをせずに稲や戸頭、守谷に行かれる様になりました。

長福寺 33 番に「ぼっくり観音」と「呆け除け不動」があります。後半の大師道は長閑な田園を歩きます。

お遍路コース地図、前半

(後半のコース地図は、此の頁の裏にあります)



お遍路コース：取手駅—弘経寺82番—第83番—第53番—白山公民館—
 一稻地区第57番—第80番—第56番—第86番—第40番—第35番
 トイレ休憩は、白山公民館だけになります。

後半のコースは、頁裏の別地図をご参照ください。
 第39番—惣代八幡社—西光寺44番—ぼっくり観音33番—
 野の井白山社62番(WC)—常総線ゆめみ野駅12:30解散予定
 稲から白山神社間はトイレが全くありません。

新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

「稲七霊場とポックリ観音さん」

取手の大鹿村の散策

取手駅西口の国道6号、取手競輪場、白山前商店街の地区は明治18年の合併以前までは「大鹿村又は大鹿」と言われていました。また、「取手」という地名の発祥の大鹿砦の地でもあります。

この記事は、相馬霊場巡る会の先達であり、取手の確信の地に代々より受継ぎ居住された、取手近代史の生き字引的存在である根本氏の貴重なお話を抜粋して掲載させて頂きます。

取手駅西口の治助坂と四ツ谷橋

小堀の利根川から白山前への道は、四ツ谷という鞍部を切り通しにして常磐線を通し、四ツ谷跨線橋を渡って白山商店通りへ至る道が佐倉道です。

千葉県佐倉と筑波を結ぶ江戸時代の佐倉藩領からの古道で、取手山王から小貝川を渡り谷田部小張街道と細川街道筑波北条に至る現在の県道19号です。

現取手ウエルネスプラザの敷地には、流通大取手寮舎があり、米穀事務所と一里塚があったようです。

また、昭和30年代までは、駅西口はなく、駅付近まで谷津の入江で6号線国道付近まで入り込んで、西口駅前ロータリー辺りは低地帯で、宇田川ガソリンタンク、成島牛乳屋などがあった程度でした。

この痕跡は、取手駅西口から線路沿いの道を歩けば、誰でも分かる様に、常磐線側は3m程高く土盛りされています。石引墓地や6号国道は台地で景観が良かったのでしょうか。

取手駅から白山や井野台へのメインロードである治助坂は、駅西口が出来る前は、自動車だけしか通らない寂しい坂道だった様でした。

「治助さん」が自殺した所と云われがあるようですが詳細は不明です。

戦後の取手駅の写真に於いても、取手駅に西口が見えませんが、取手駅改札は東口のみであり、取手白山方面へ行くには、東口から四ツ谷橋を使ったのではないのでしょうか。

線路西側沿いの治助坂は、大利根橋開通による陸運交通の利便性と、鉄道による居住者増加の影響で出来たのではないかと思われます。

従って、鉄道の影響で出来た道と思われれます。

大鹿城跡付近と利根川を望む

金毘羅様から坂を戻って、競輪場駐車場(その昔は競馬場)を南下し競輪場の高台の南端の坂の西側の土地を削った部分に大鹿城がありました。

大鹿城は、平将門の末裔である大鹿左衛門織部時平が承久二年(1220)頃、大鹿村の一万町を領して高台南端に砦を築きました。しかし永禄三年(1560)、

大鹿城主太郎左衛門の時、小文間城主一色宮内政長の奇襲にあい敗北し、大鹿氏は滅亡しました。

その館跡は、利根川谷津の入江状となった少し奥まった高台で、北の背後以外は見通しがよい所でした。今は宅地造成で崩され、跡かたもない。

県信(2021)洋服の青山交差点付近であります。

これを囲むように、北側に高台が続いている北口妙見組(競輪場付近)、キャノンの高台の南端にあった仲間台妙見組、新町高台の南端に位置する添弁天

組の3部落の総勢約七十名を総称して大鹿村と呼んでいました。

「花立山」という所があり大きなもみじの木があり、そこには大鹿太郎左衛門の墓があったという。

「花立山には饅頭みたいな形の石ころがあったので長禅寺へ持っていった」五輪塔を指しているようである。大鹿の砦の「砦」が「取手」の発祥となっています。取手の名の由来は民話にもあります。

城主大鹿太郎左衛門は風邪をこじらせて寝ていたとあります。雁金山の戦い という民話です。

また、稲城主の高井十郎は闇討ちを聞きつけていち早く大鹿城主を逃避させてから、我孫子柴崎城主に応援を求め、小文間城主は千葉へ逃避、小文間城は我孫子連合軍下に統括されました。

鹿塚(しづか) 新町5の7城山公園跡

宅地造成前は、利根川近くの田んぼの中に丸くこもりした塚があった。そこに大鹿氏の名馬「城鹿」を埋めたと言われていた。今は宅地用地の一角が公園用に空地になっています。

利根の河原のむかし

河原は、野口雨情の「船頭小唄」や高村光太郎の「利根川原の美しさは空間の美である」と歌われた。

愛宕神社から、昔は真っ直ぐ利根川の渡しに行く道があった。その途中に小川に掛けた橋が(現在、ゴルフ練習場内の橋梁下)、君初橋と言われて歌にもうたわれました。

明治天皇が明治17年に牛久の女化原大演習に御幸の際に渡った渡しであり、また、そのときの渡し船が利根丸という新造船であった。

上新町の利根川は、世界大戦前後は水泳場、河川敷は湿地帯を中心に茅場と魚取り場であった。常盤線鉄橋と今の国道橋との間に今はなきドックといわれる利根川からの入江があり浚渫船を修理する、内務省東京土木出張所取手機械工場があった。

資料提供、2002年1月 記

打始(うちはじめ)

第八十二番、取手市白山の大鹿山清浄院弘経寺

(おおしかさんせいじょういんぐぎょうじ)

ご本尊、阿弥陀如来。浄土宗鎮西派

徳川家御朱印寺

移し寺、香川県青峰山根香寺(ねごろじ)

御詠歌、宵の間のたえ降る霜の消えぬれば

あとこそ鐘の勤行(こんぎょう)のこえ

大鹿山清浄院弘経寺

水海道の飯沼弘経寺、結城の弘経寺とともに「下総の三弘経寺」と呼ばれています。

開山は浄土宗を中興した第七祖聖因(しょうげい)の弟子良肇(りょうじょう)が応永二十一年(1414)、飯沼の弘経寺の分け寺として、当初人家もない山中に草庵を設けたのが始まりと云います。

弘経寺は、戦国時代は大鹿城主の菩提寺でした。

大鹿城主であった大鹿太郎左衛門は、小文間の一色宮内に襲撃された時に、弘経寺の娘であった奥方を弘経寺に逃がしたと云われています。

後に、一時無住の時代があったといわれている弘経寺ですが、天正十九年(1591)徳川家康が当地に遊獵の際、案内をした住職の宣誉上人が有徳(徳行)のすぐれている事や人の僧であったため、特に境内外三十

石の御朱印地を授かり、以来御朱印寺としての格式を備え、堂宇の規模も拡大されたそうです。

更に、弘経寺歴代住職の中から学徳兼備な照誉了学(しょうよりょうがく)、天文十八年(1549)寛永十一年(1634)、下総国千葉氏重臣高城胤吉(三男)上人は、徳川家の菩提寺である芝増上寺上任とあります。

また、現在も家康をはじめとする十一代の徳川家御朱印が保存されており、貴重なものです。

取手市には浄土宗総本山知恩院の法然の流れに類します。但し、弘経寺は徳川家の家紋三つ葉葵を寺紋にしている様に、芝増上寺寄りです。

なお、山号の大鹿山は長禅寺と重複しています。

※ 照誉了学については巻末に詳しい説明掲載。

山門の脇に、白山大権現の祠があります。

白山商店街は、枯渇してしまいましたが、地名の白山前の由来になっています。かつては商店街の中心に白山神社として祀られて居り、金刀比羅神社と共に人気が高く多くの参拝者を招いて賑わっていました。

千姫の天樹院弘経寺

水海道飯沼の寿亀山(じゅきざん)天樹院弘経寺には、徳川幕府二代将軍秀忠の長女の千姫こと天樹院の廟所(びょうしょ)があり結髪の一部が壺に収められています。千姫は遺言により文京区の伝通院に埋葬されていますが平成9年の墓所改修と調査で遺髪ではなく遺骨が発見されました。

飯沼弘経寺の境内には、一切経典の書庫である六

角輪蔵(経蔵が回転する)があります。

また、飯沼と結城にある弘経寺は、関東十八檀林(だんりん)の一寺でもあります。

江戸時代初期に定められた関東における浄土真宗の僧侶の養成機関で学問所をいいます。

江戸時代の浄土真宗法度により僧侶の養成については、この十八カ寺に限られていました。

武蔵国・増上寺(港区)、伝通院(文京区)、

靈巖寺(江東区)、靈山寺(墨田区)、

幡随院(小金井市)、蓮馨寺(川越市)、

勝願寺(鴻巣市)、大善寺(八王子市)、

浄国寺(岩槻区)

相模国・光明寺(鎌倉市)

下総国・弘経寺(結城市)、東漸寺(松戸市)、

大巖寺(千葉市)、弘経寺(常総市)

上野国・大光院(太田市)、善導寺(館林市)

常陸国・常福寺(那珂市)、大念寺(稲敷市)

弘経寺祐天上人と累(かさね)ヶ淵

2008年4月12日に、飯沼弘経寺本堂の落慶式が執り行なわれました。江戸時代からの姿で残っていた本堂は荒れ果ててしまい、雨漏りが酷いため新築され完成の記念式典がとり行なわれました。

更に翌日13日は水海道の毎年行われる恒例行事「千姫祭り」がありました。千姫の御廟がある弘経寺から水海道市内までの行列歩行は、天気にも恵まれ大勢の人で賑わいました。

飯沼弘経寺近くに、三遊亭円朝の怪談噺「真景累ヶ淵(しんけいかさねがふち)」で有名な「羽生村のお累

(るい)の墓が残る法蔵寺があります。常総ウオークは水海道から鬼怒川の累ヶ淵を歩くコースなので是非立寄ってみて下さい。お累の墓は目黒のさんまで有名な、東横線沿線の祐天寺にもあります。

祐天寺の祐天上人は、弘経寺で修行中に、お累の悪霊を解き成仏させたと云い、当時人気の僧でした。

第八十二番、国道294号脇、井野野中の諏訪宮、

ご祭神、諏訪大明神。

ご本尊、聖観世音菩薩、

移し寺、香川県神毫山(しんごうさん)一宮寺

御詠歌、さぬき一宮の御前におおぎきて

神の心を誰れかしらゆう

常磐線井野踏切近在の**昌松寺**(しょうしょうじ)にも八十三番があります。江戸時代に村人と共にお寺が移ったため、2ヶ所になってしまいました。どちらの83番が本物か？ 人気では、諏訪宮こちらの札所のようでした。

白山に建立された諏訪山昌松寺は、江戸時代に井野台へ移った先が、現在の井野台の相馬霊場第23番薬師堂がある井野台北坪集会所でした、しかし昌松寺は現在、83番と共に井野2丁目へと移っています。昌松寺の住職に話を伺いました、当然として「境内にある札所が本来の83番です」と説明されました。だが、住職は「医王院」という院号に疑問を抱いた話しをされました。

井野台の薬師堂が昌松寺跡であるのに、現在の昌松寺は、阿弥陀三尊が本尊であること、つまり井野台から井野に移った時に、薬師如来を置いて来たこと

いうことでした。

すると相馬霊場第83番に於いても、白山から井野台に昌松寺が移った時に、札所を置いてきたのではと勘ぐります、しかし事態はもつと深刻でした。

取手市史の民族編では、逸話として、昌松寺が諏訪山(白山)から井野台に移した時、寺を受け継いだ住職にたいして、23番と83番の二つの霊場に反感した身内の者が札所を元の白山へ戻した、とありました。それが檀家や当時の人々の共感を受け、白山の札所に賛同者が増えることとなり、今に至る。とありました。

取手市史民族編より
白山の83番札所には、誰が寄贈するのか、垂れ幕や襷をたすき、納め札が貼られ、お遍路さんが訪れている様子が残っています。

第五十三番、弥陀堂跡地

ご本尊、阿弥陀如来、御堂廢墟とともに消滅。

移し寺、愛媛県須賀山円明寺(えんみょうじ)

御詠歌、らいごうのみだのひかりの円明寺

てりそふかげをよなよなの月

瘡かさ神様の阿弥陀さんの弥陀堂はお隠れした。

大師霊場の佇まいの保存は良いのですが、弥陀堂の朽果て荒廃した姿は、2011年秋解体されました。相馬霊場の、衰退している姿を偶然でしたが見る事が出来ました。札所を維持する組織の中核であった「講」という組織が衰退してしまつたことにより、訪れる人達のいなくなった御堂は、建物を守ることも難しく、姿を失っていくのですね。弥陀堂の阿弥陀如来像は「かさの神様」といって

瘡神様、または瘡蓋(かさぶた)神と云われ、おできや梅毒(ばいどく)を治してくれる神様でした。

光音堂と金刀比羅神社。長禅寺が供持する地。

天明元年(1781)九月創立、祭神、大物主命。

観覚光音禅師による、四国の金毘羅宮の写しです。仏教読みが金毘羅宮、神教は金刀比羅宮であり。

箏平、金毘羅、書き方は問わないそうです。

相馬霊場と観覚光音禅師

相馬霊場創始者観覚光音禅師(伊勢屋源六)

江戸時代中期の人物である伊勢屋源六(1711年〜1783年)は、信州佐久海尻の出身で、16才の頃江戸伊勢屋に奉公しました。

やがて源六は、取手宿内で穀物商(伊勢屋)を営み、三軒の店を構えるほど、繁盛させていました。

商いの傍ら取手宿の繁栄の為に尽くし、多くの人々から慕われたといわれています。そんな折、源六は長禅寺の幻堂和尚と親しくなり、神仏に帰依する念が強くなります。

そして宝暦十年(1760)、源六は家も商いも全て妻に譲り、出家して和尚の弟子となりました。

出家して観覚光音となった源六(以下、光音)は、下総国相馬郡の取手宿や我孫子の村を、経文を唱えながら巡り、貧者への施しや病者への救いを行なつたと伝えられています。

また、荒廃した長禅寺の観音堂を「さざえ堂」に改装したり、新四国相馬霊場を開設するなど、数々の功績を残しました。観覚光音の活躍もあり、当時

の取手宿は大師信仰の町として近隣に名を響かせ、宿場全体が活気を帯びて繁栄しました。

取手の金刀比羅神社は、安永八年(1779)利根川の交通安全を祈願して観光光音禪師が、四国讃岐の金毘羅宮から勧請したと伝わっております。

光音は晩年、金刀比羅神社に草庵を建て隠居し、水不足に悩む住人に光音井戸を掘削しました。

「三神の威徳の水のます井より 大師の利益くむぞうれしき」と碑が残っています。

(ここで言う三神とは、養蚕の稚産霊神(わくむすひのかみ)、五穀守護の倉稻魂神(うかのみたまのかみ)、保食神(うけもちのかみ)の神です。

天明三年(1783)十二月十七日光音禪師は天命を全う、享年七十三でした。

辞世の句、「日々に運び歩みの後消えて行くとも知らずもとのすみかへ」

元長禪寺境内の千体観音堂。

織部時平により十一面観音と千体観音堂は、此地にありました。観音堂は三世堂が出来る迄、本尊だけ引越して観音堂は元のまま残したと思われま

す。かつて 取手競輪場があるあたりは大鹿山或いは大鹿原といわれ、雑木が生い茂る深山で、大鹿左衛門の居館大鹿城があったとされる旧跡の地です。

承平元年(931)、平将門勅願所として長禪寺創建、将門没後、御厨(みくりや)三郎吉秀が守り本尊十一

面観音を奉納、との伝承です。元禄六年(1699)、長禪寺は創建の地大鹿山から現在の地に移転する。(取手市史)

宝暦十三年(1763)、住職春翁の代、

三層構造の三匠堂形式の殿宇、白嗣殿(はくしでん)再建なる殿宇に本尊十一面観音と、西国、秩父、坂東各々の百観音を三壇に配構安置す。

入仏導師役先住の幻堂、願主は新四国相馬霊場開基の光音が勤める (取手市史)

安永八年(1779)、大鹿山の旧長禪寺跡地に供持所として琴平社(金刀比羅神社)を光音が設営

寛政二年(1790)、大風で白嗣殿(はくしでん)設営当初の栄螺堂の堂名)百観音が破壊

享和元年(1801)、三世堂として再建、堂宇棟札の銘文に宝暦の白嗣殿の古材が再利用された。

明治元年(1868)、神道と仏教の分離を図る神仏分離令が発せられる。廃仏毀釈運動が起きる。

明治四年(1871)、社寺上知令と相まって、余波は寺院の荒廃・廃合廃寺・排仏、仏画等の焼却、により僧侶職排除は、神官転身への激増を招いた。

長禪寺は新町移転後、創建地大鹿山長禪寺境内は奉還を免れた。どうしてか・・・?

明治八年(1875)、第二次上知令「社寺境内外区画取調規則」通達。

創建時の境内は「祭典法要ニ必需ノ場所」として、更に明治維新政府で朝廷権力が復活により辛うじて、上知令の過酷な法の目をくぐり抜けたと思われる。

明治24年(1891)、取手に在住していた、菊池幽芳の自叙伝「蝶螺堂の落日」、私小説「白蓮紅蓮」の小説文に、明治二十四年頃の大鹿山長禪寺境内の三世堂の様子を廃墟寸前のように記述している。

菊池幽芳、自叙伝『栄螺堂の落日』、

小説『白蓮紅蓮(しろはすべにはす)』

明治3年10月27日(1870/12/18~1947/7/21)'

小説家、本名菊池清、明治21年(1888)茨城県北相馬郡取手高等小学校(現在の取手市立取手小学校)の教師となり、3年後隣家の杉本玉枝(17歳)と婚約、幽芳が大阪赴任の為三世堂でしばしの別れを誓い、大阪毎日新聞社へ、後に取締役を歴任した。

現在、同じタイトルの劇画や春本があるが、作者は別人であり全く関連がありません。

~~~~~ 本文

白蓮紅蓮から：

栄螺(さざえ)堂といふ建築物については、私は外の土地のものは知らぬが、…と作者は文中に残し、白蓮紅蓮に描いた栄螺堂は、長禪寺の栄螺堂をモデルにしたもの…と断わった上で、恋人雪路との惜別の記念に、馬で長禪寺の栄螺堂である三世堂を目指す設定となっている。

「高宮さん、この向ひの方に、こんもりした小山が見えますね。」

「その森の間に小さな塔のやうなものゝ先が見えて居りませう、」「あれは栄螺堂よ・・・、」

「栄螺堂といふのはどういふ譯(わけ)なのですか」「中が丁度栄螺の殻の様になって居て、ぐるぐる廻ると、自然に上へ行けるやうになっているからよ」

「それでは階段が螺旋形に頂上までとどいて居るのですね…、」(三世堂は螺旋階段ではない)

「よく多寶塔(たほうとう)ってあるでせう、ざあーとあんな形よ。一寸この邊(あたり)の名物なんですけど



も、誰も構はなくなつたもんですから、もう随分荒果てゝ居る筈よ。私も、五〇六年以上、上がった事ありませんけど…。」

「何でも私などの知らない昔にはお寺があつたのよ。今は堂守の住む小さな庵室のやうなものがあるばかりだわ。」一人はすぐ小山の下についてた。

それは併し小山といふよりは、丘といふ方が適して居る位で…この山の正面には、一間幅ほどの、草だらけになつた参詣道がついて居てその両側には櫻の古木や、松などが齒のぬけたように生えて居た…その参詣道から頂上の古びた山門のところまで、一直線に、大分並びのわるくなつた、凸凹だらけの石段がついているのである…。

石段を上り盡(つく)して山門を潜ると廣場があつてその正面の突當り(つきあたり)に栄螺堂があつた。

山門と栄螺堂と三角形をなして居る地點に萱葺屋根に草が生え、柱の傾きかけて居る小さな庵室があつた。随分庵室や、栄螺堂の周囲には草などが生えて居て…すべてが荒寥(こうりょう)そのものゝやうな光景であつた。

栄螺堂は垂木や廂などの外部に塗つた胡粉や、青や、赤やそんな色が、もう何百年の風雨に曝されたかのやうに、剥落して了つて…。

堂の前に来て見ると、見かけたほどに荒れても居ず、傾いた柱とてもなく、建築當時は相當に念を入れたものらしく、なかなか頑丈な材木で組み立てられてあり、下は石畳になつて、奥に阿彌陀様のやうなものが安置され、その前には色のあせた作り花などが塵埃塗れ(じんあいまみれ)になつて居て、入口近

く、手垢ずれに禿ちよるけど、なつたお賓髓頭盧様(びんづるさま)があつた…。

この階段の壁の方には、三萬三千體あるといふ、小さな無細工な佛様が取つけられてあるのが半ば失なり、残つて居るものも手足が欠け、箔が剥、見る影もなくなつて居る…。(原文のまま転載引用)。

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

この描写は、現長禅寺境内を描写している。

三匠堂ともいう、本所五百羅漢寺の栄螺堂が歴史的には最も古く寛保元年(1751)だが焼失して現存しないので今や取手栄螺堂が最も古い。本所五百羅漢寺は北斎の浮世絵に残っています。

幽芳は、現場を見ることのできない不特定多数の読者・お茶の間・衆人に伝達するジャーナリズムの手法、即ち、報道スタイルで発信することを編み出した先駆けだったのではないでしょうか。

つまり、菊池幽芳は『栄螺堂の落日』に書いている通り、この町で教鞭をとっている間に何回となく栄螺堂を訪ねているのは、時勢に取り残され、人手が絶え等、閑(なごり)にされながらも、先人先哲の澄明な Spirit がふんふんと漂い、発揚し、菊池の精神に食い込んでくるものがあつたのではないか。

裏を返せばそれは新聞記者としての己に対する戒勅でもあつたのでしよう。

特に、〓二人はすぐ山の下についてた(中略)小さな無細工な佛様が取つけられてあるのが半ば失しない、残つて居るものも手足が欠け、箔が剥、見る影もなくなつて居る…』の克明な描写は、何よりも廃寺跡の三世堂に対する菊池の記者魂がにじみ出て居る文

節です。

菊池幽芳がこの作品を書いた明治二十四年という年は、実は、上知令で家政が苦しい古社寺の体制保護と維持のため全国社寺に対し、古社寺の修繕・維持の実行が確実な社寺団体への勸奨の名目で見舞金が支給されることになり、『古社寺保存費下付取調書』なる制度が内務省社寺局扱いで下達された年でもある。そしてこの後、同二十八年内務省は「古社寺調査事項標準」を定め、同三十年の「古社寺保存法」公布へと受け継がれていく。 某HPより

白蓮紅蓮は、無声映画時代に映画は大ヒットしているが、そのフィルムは残っていない。

また、この本は一部頁欠けはあるものの、『C』で無料公開されていたのでコピーを入手したものです。

### 個人宅で守ってきた、稻七霊場札所

取手市稲という村に七か所の霊場札所が密集しています。しかも四十番を除く六札所は個人宅で所有している御堂に大師像を祀っています。

毎年二月二十一日の大師日には、食膳が供えられていました。

### 第五十七番、阿弥陀堂と霊場は個人所有、

ご本尊、阿弥陀如来

移し寺、愛媛県府頭山栄福寺、

御詠歌、この世には弓矢を守る八幡なり

来世は人を救う弥陀仏

大師堂は、昭和八年再建で寄進者は東京八十八度会。毎月二十一日に集落の八軒が供花や供膳を当番

で行っていました。

桑原の光明寺は、西向かいの山中にありました。

光明寺も第40番薬王寺と同じ様に度重なる火災により廃寺となりましたが、寺の檀家であった人達は、桑原へ移った光明寺の本堂の一角に稲村専用の遺影を残したそうです。現在はありません。

猛暑日の竹林はとても静かで涼しくて一休みするには絶好です、風が吹けば自然の竹林のオーケストラを聞く事ができます。

キリンビール取手事業所の東側に位置する。

無量山宝幢院(ほうしょういん)光明寺、真言宗豊山派、元土浦市法泉寺末、建治二年(1273)稲に創立、その後天文20年(1551)桑原に檀家と共に移転しました。

御本尊、阿弥陀如来。移転時には、稲の檀家の為に、特別に別室を設けていた様でした。

境内に、長谷川伸(明治17年(1886)〜昭和38年、小説家、劇作家)作の戯曲『一本刀土俵入』の主人公である、駒形茂兵衛の像が祀られています。

実は劇中に登場する、酌婦のお蔭が茂兵衛に声をかけた、我孫子屋は取手の茶屋旅籠でした。

路銭が無く途方にくれていた茂兵衛を、元気づけたお蔭は、数年後に横綱にはなれないまま取手に戻った茂兵衛に、やくざ者から助けられるという、人情時代劇でした。

## 第八十番、毘沙門堂と霊場は個人所有、

ご本尊、毘沙門天。

移し寺、愛媛県白牛山國分寺、

御詠歌、国を分け野山をしのぎ寺々に

詣れる人を助けまじませ

関ヶ原の合戦(1600)の後、先祖が毘沙門天を背負ってここに土着したといひます。

屋号を武左衛門と言うそうです。

大師堂の中に、錦の札が貼ってありました。

春先、野田より十数人で参拝に來られる様です。

## 第五十六番、霊場は個人所有、

ご本尊、地藏菩薩、地藏堂はない

移し寺、愛媛県金輪山泰山寺(たいさんじ)、

御詠歌、みな人のまいりてやがて泰山寺

来世のいんどうたのみおきつつ

かつては旅坊主といわれた僧が住み三月二十一日に大師講の男女が念仏を唱えたという。

『山崎主水(もんど)の碑』の要旨、主水は織田信長の三男神戸信孝に家老染野民部(取手本陣の先祖)と共に仕えたが、天正十年(1582)山崎の一戦で秀吉に反旗を奮い滅ぼされた。

主水は、武蔵国で同士大鹿太郎左衛門と共に下総国に落ち、大鹿村と稲村の郷士(こうし)、江戸時代にあった階級の一つで武士の一種、名字帯刀(みょうじたい)という、苗字を公称し打刀と脇差の二本の刀を腰に帯びられる)を許されていた。

家系もはっきりしているものが多かった。

山崎主水(戒名、宗休同意居士)より十四代後に地藏堂内へ小野山崎家の碑を建て追善供養した、とあります。

## 第八十六番、稲観音堂と霊場は個人所有、

ご本尊、十一面観音

移し寺、香川県補陀落山志度寺(しどじ)、

御詠歌、いざさらば今宵はここに志度の寺

祈りの声を耳にふれつつ

昭和四十年頃観音堂の改築の際、古文書が発見されました。

平成15年、境内が整備され大師堂が新しくなりました。銅版葺屋根にリニューアルされ、堂前庭も整地されましたが古い樹木と石柱は残されています。

写し元四国の志度寺について

志度寺には「海女の墓」がある。天智天皇のころ、藤原不比等が亡父鎌足の供養に奈良興福寺建立を願した。

唐の高宗皇帝の妃であった妹はその菩提にと三つの宝珠を船で送ったが、志度の浦で龍神に奪われてしまった。兄の不比等はあきらめきれず、姿を変えて志度の浦へ渡り、土地の海女と夫婦になり一子、房前(ふさまえ)をもうける。

やがて海女は観世音に祈願して、夫と子のために命を捨てて龍神から宝珠をとりかえす。

不比等は海辺の近くに海女の墓と小堂をたて「志度道場」と名付けた。後に房前が寺名を志度寺に改めたと言われている。

また、境内にはめずらしい、脱衣婆堂がある。

## 第四十番、稲村山連竹院薬王寺(廃寺)、

ご本尊、薬師瑠璃光如来

移し寺、愛媛県平城山観自在寺、

**御詠歌**、心願や自在の春に花咲きて

浮世のがれて住むやけだもの

寺は、寺子屋で守谷の西林寺の末寺であったため、天台宗の僧が師となつて教えていました。

後に稲戸井村尋常小学校稲分教場となりました。

薬王寺は二度に渡る火災の為、焼失により桑原の光明寺に移されたおり、薬王寺は消滅しました。

稲村山連竹院、この辺り竹林が多い、又札所が集めても賑わっていたそうですがその面影は現在ありません。2003年現在、薬王寺の経緯を説明していた石板があつたが廃棄している。境内の無患子(むくろじ、羽根突き)の羽の珠になる実をつけるだけだけが薬王寺の複雑な歴史をみてきたのでしょうか。

尚、80番から40番との間に立派な薬医門のある屋敷があります。取手では珍しい門です。

平成から令和になりましたが、昭和からの疑問である「稲七霊場の密集の理由」は未解決です。

**第三十五番**、薬師堂は無、八重桜の古木が美観。

**ご本尊**、薬師如来

**移し寺**、高知の医王山清瀧寺、

**御詠歌**、澄む水を汲めば心の清瀧寺

波の花散る岩の羽衣

稲には城の名のつく地名が残っていました。

現在も屋号として一部使われています。

城の内、現在三十五番の辺り。

城の台、現在五十六番の辺り。

古戸城、江戸川学園のふれあい道路辺りに城郭が

あつたと言う。

馬場山、現在の地図上に山のような地形跡がない。

城山、五十七番辺り。

雁金山の合戦に「稲村の陣屋より蛭原但馬」という名が出てくる、稲城主、高井十郎の家臣であつたと言う。

**第三十九番**、薬師堂、霊場は個人所有で

屋号を「吉朗次」稲海老原総本家。

**ご本尊**、薬師如来

**移し寺**、高知県赤亀(しゃき)山延光寺、

**御詠歌**、なむ薬師諸病悉除の願こめて

詣るわが身を助けまませ

海老原の姓は、昭和の初期頃「蛭」を縁起の良い「海老」に変える家が全国的に広がった様です。

戦時中この薬師堂は、疎開してきた人達が暮らしていたそうで、かなり大きなお堂であつたそうです。

又、昭和時代迄は大師堂の世話役として会番制度があり、お膳や御供物のお供え、お遍路さんの接待などを、毎年交代で行っていたそうです。

墓地から利根川対岸の柏市布施と土谷津が望めます、取手市野々井と柏市土谷津の渡し舟「野の渡し」が、明治13年10月陸軍二万分之一地図にありました。

**【四国延光寺について】**

延光寺は土佐国と伊予国の境に位置する宿毛市にある。境内に住んでいたという赤亀が、竜宮から背負ってきた、という鐘があり国重要文化財となっている。延喜11年(912)と年号が刻まれています。

**稲村の山崎庄兵衛**、

江戸時代の西国(さいごく)観音霊場巡礼と

四国(しこく)お遍路の旅

明和五年(1768)の四月から七月にかけて、稲村の山崎庄兵衛は、西国三十三観音霊場巡礼と四国八十八か所お遍路の旅に出ています。

西国観音巡礼とは、現在の京都と大阪府、和歌山と奈良と滋賀と兵庫と岐阜県の二府五県にある観音菩薩をご本尊とする寺院、三十三か所を、巡るものです。「法華経」に観音菩薩が人々をお救いになる時に三十三のお姿に変化すると説かれていること由来する信仰です。

さて山崎庄兵衛の巡礼と遍路の行程は、納経帳に記された寺社名と日付から知ることができます。

納経帳とは、寺院に参詣し写経を奉納した際にその御朱印(宝印)を押していたたく帳を言います。

納経帳によれば、稲村出立の日はわかりませんが、四月八日には江戸の寛永寺と浅草寺に参詣し、東海道を西に上り、十日には、時宗の総本山である藤沢の清浄光寺(遊行寺)に、12日には三島大社に参詣し、次いで23日には伊勢神宮(内宮)と朝熊岳(❖)に参詣していました。

そして江戸を出てから23日目の四月晦日、西国観音一番札所の那智札所実方院に詣で、以後西国観音巡礼に入ります。5月23日に二十三番札所の摂津国中山寺に参詣すると瀬戸内海を渡り四国に入ります、ここからは四国お遍路となります。

四国お遍路は七十八番札所の讃岐国郷照寺から始まり、八十八番の大窪寺までは順に廻り、次に十番

の切幡寺からは逆さ打ちで(逆順)で、一番の靈山寺に向かいました。十七番妙照寺、十六番観音寺を参詣した後は、十一番藤井寺からはほぼ順番通りに札所を廻っています。7月13日、七十七番札所の讃岐国道隆寺で四国お遍路は満願成就となり、7月16日の播磨国円教寺、西国観音二十七番から再び西国観音霊場巡礼に戻ります。

27日には西国三十三番の美濃国華嚴寺に参詣し、西国巡礼も満願成就を迎えます。江戸を出てから百十二日目でした。以後取手に戻るまでの足取りは不明です。山崎家は稲村で村役人を務める家でしたので、信仰心に加えてある程度の経済力があつたので可能だったと言えます。 稲村山崎家伝古文書

(※) 朝熊岳金剛證寺(あさまだけこんごうしょうじ)

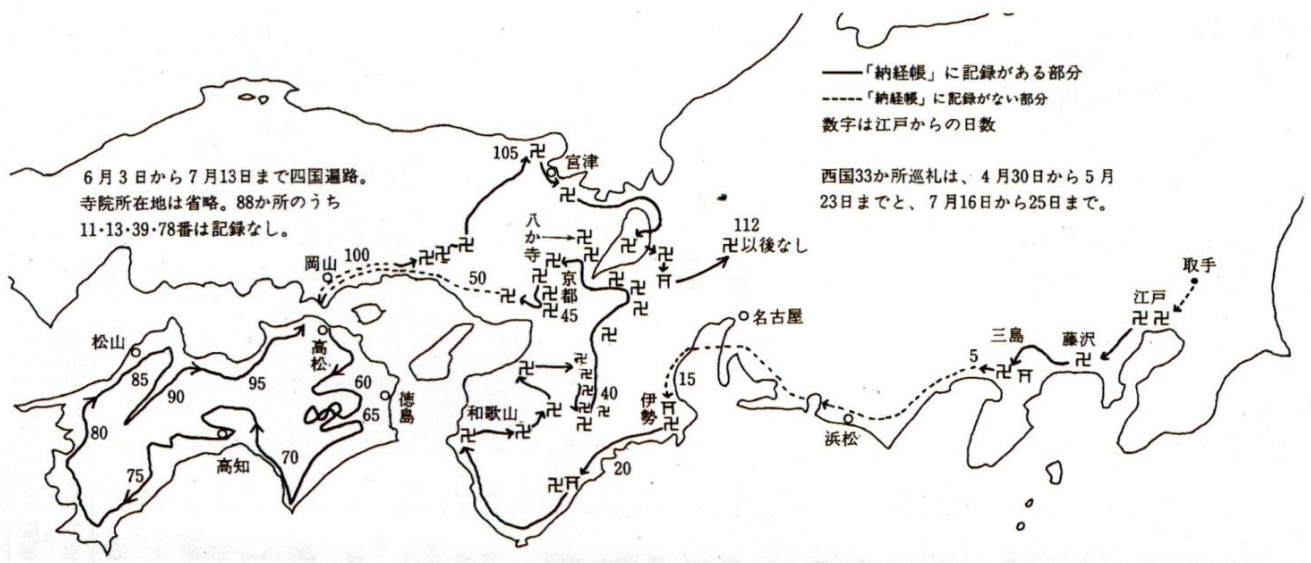
「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と伊勢音頭の一節にも唄われています。

高さ3〜4mの板塔婆が、何百本も連なる山道は金剛證寺でしか見られない光景で必見です。

山頂に近い為伊勢湾の遠望は素晴らしく絶景です。境内も真言宗の大寺の為、広い伽藍を楽しめます。

江戸時代の西国三十三観音や四国八十八札所巡りについては、関東や東北地方の旅では信州善光寺を巡礼が無事終わろうとしている、お札参りとして必ず訪れた様です。旅の帰り道でもあるのでついでに寄ってしまおうということですね。

現在でも、この風習は残っており、西国、秩父、坂東観音巡りでは善光寺と北向観音を訪れます。当時これだけの巡礼と遍路の旅に出ることは、なかなか



明和5年 山崎庄兵衛西国巡礼・四国遍路行程略図

かできることではありませんでした。

**第四十四番** 大野山教王院西光寺、創建不明。

〔本尊〕 阿弥陀如来

〔移し寺〕 愛媛県菅生山大宝寺、

〔御詠歌〕 いまの世は大悲のめぐみ管井山

ついにのみだのちかいをぞ待つ

女僧の創建と聞く、小堂の脇に小さな大師こしかけ石がありました。昭和の時代は薬師如来立像であり、待合所に祀られています。

明治時代、稲戸井村尋常小学校野の井校の仮校舎として使われていましたが、野の井小も廃校です。

本堂西側竹林の谷戸堀に石垣が残り、戦国時代の城郭のような趣が伺え、本堂の流れ造りの屋根がまるで天守閣の様に見えます。

**西光寺を訪れた小林一茶**、「七番日記」より。

一茶は、文化八年三月二十二日に、守谷の西林寺から布川への途中で、西光寺と惣代八幡を訪れたとの記録「晴れ、野々井村西林寺に寄りて、聞・・」と書かれています。

**流れ灌頂**(ながれかんちょう)

此の時の出来事の様ですが、以下の話は後世の逸話の可能性あり。但し、流れ灌頂は、相馬や信州に残る風習であつたのでご紹介します。

一茶は、西光寺へ向かう途中で道を間違え、田圃のあぜ道を行かねばならなくなり、流れ灌頂に出会いました。

流産や産後の肥立ちが悪く幼くして死すと、人通り

の多い田圃のあぜ道に青竹四本が立てられその上に白布が張られ竹の柄杓(ひしゃく)が置かれる、白紙にくるまれた髪の毛と櫛等が別の青竹の白布に置かれ、塔婆が立つ。旅人は柄杓で田の水を白布に掛ける事により白布は褐色に変わり、色が変わり百日以上経過していれば、その霊は浮かばれると信じられていました。

南無阿弥陀 なむあみだぶと こき茶哉

### 第三十三番、野の井のぼっくり観音、

青野山不動院長福寺、住職は法要時のみ来寺。

**ご本尊**、阿弥陀如来

**移し寺**、高知県高福山雪溪寺(せっけいじ)、

**御詠歌**、旅の道うえしも今は高福寺

のちの楽しみ有明の月

長福寺は、延喜一年(902)守谷の西林寺末寺として創建永祿二年(1550)承応上人によって開山。

当初は白山神社の別当寺でした。

ポツクリ観音の他に、呆け除け不動堂、鐘楼があります。鐘楼の鐘は安永四年(1795)のもので、戦時中供出されたが、鉄として溶かされる直前に終戦を迎えた。その後、山梨の善住寺に渡ったが「元の寺へ帰そう」となり長福寺に戻ってきた鐘であるそうです。

守谷の西林寺 64世の義鳳上人、俳号鶴老(かくろ)は、俳人小林一茶の師匠でした、鶴老は晩年隠居として余生を送った隠居寺でした。

天保四年三月十三日没、お墓は西林寺にあります。「筆子の碑」不動堂の脇にある。

筆子とは教え子。勉強を教えた師匠に対する感謝

の念で、主に女生徒から建立された記念碑です。

長福寺の寺小屋は、西林寺の僧侶が師匠となり多くの生徒を育てたのでしょう、千葉県柏や守谷、藤代の広範囲にわたり多くの生徒が集まってきたようです。寺小屋は「野の渡し」の近くにあった様です。

【四国の雪溪寺について】

雪溪寺には薬師三尊が祀られている、御本尊の薬師如来と脇侍の日光・月光菩薩は運慶作と言われている。更に運慶の息子湛慶(たんけい)作の善膩師童子立像は有名で、つぶらな瞳で小首をかき上げて空を仰ぎ見る姿は愛らしい。

善膩師童子は、毘沙門天と吉祥天の子です。

### 第六十二番、野の井の白山神社、

**ご祭神**、伊弉諾尊(いざなぎのみこと) 取手市史

**移し寺**、愛媛県天養山宝寿寺、

**御詠歌**、さみだれのあとにいでたる玉の井は

しらつばなるや一の宮かわ

養老二年(718)長束三兄弟が加賀国の白山神社を勧請して創建、享保12年(1727)以来からの棟札が残されており、神社の改装や屋根の葺替え修復の歴史を知る貴重な資料となりました。

実祭神は白馬に跨る白山姫尊が祀られています。

この神社には、本能寺城の城跡の言い伝えが残っている、境内を囲むように高さ50cm〜100cmの土塁が廻っていて、本能寺とは、堀之内の転訛したものと考えられています。疑問多く不明(取手市史より)又、この神社には神主がいないため、週一度の境内掃除が会番によって行われていました。

本殿の彫刻は会番に頼むと見せてくれる、女性は「駄目」といつていたが現在では表向きの様です。本殿の壁には中国の二十四孝の彩色の彫刻が3面にあります。

### おびしゃ取材ノート

毎年、一月の第3日曜日に、オビシヤ祭事が行われています、夏の祭りに比べると、派手でなく質素で静かに厳かに行われます。

おびしゃ、オピシヤ、オブシヤと云われ、とくに利根川流域で盛んに行われる廿日正月の農耕神事。

武士の流鏑馬(やぶさめ)の騎射(きしや)にたいして農民が的を弓矢で射てその年の豊穰(ほうじょう)を占う歩射(ふしや)に由来すると云われています。

「奉社」の字もあてられることがあります。

野々井のオビシヤは、女性禁制の御祭りでした。

以下、2009年の野の井白山神社での体験より。

二部構成で、まず子宝授受祈願の祭から始まる。

魚篩(さかなふるい)という古式に従って行われます。

2つの部落毎に行われ、全4部落なので2回繰り返される事になります。二人の子供は、それぞれの「酒膳」を持ち背後の大人と一緒に、神官の前で酒膳に御神酒(おみき)を注ぎます。

神官は2つの部落の御神酒を受けそれぞれの御神酒を黒椀の中で混ぜ合わせそれを飲み干します。

神官が両手を広げると一斉に「ポツクリ シヤック リズーイズイ」と掛け声がかかり同時に子供はゆっくりと3、4歩後ずさりし再び「ポツクリシヤック リズーイズイ」で神官の前に戻ってきます。

同じ行為を3回繰り返された後、左右の子供が入れ替わりそれぞれの子供は相手の部落の参加者に酒を振る舞い、終わります。

二人の子供から受けた、それぞれの御神酒を黒椀に移して混ぜるといふ行為の意味と最後の子供が相手の部落の参加者に御神酒を振る舞うといふ行為にお互いの部落への好意的交換と和合を願ったものを感じとれました。

3回繰り返される掛け声の意味は、「ボツコリ(ムツクリとも言うが男の勃起)シヤツクリ(女の快感)、ズーイズーイ(Hそのもの)」を露骨に表す、男子だけの行事で、男の子への日本古来の性教育の一つであり、子孫繁栄を願う掛け声のようでした。

この後、五穀豊穰を願う行事である、鳥追い行事(鳥討ち)が境内(田畑で行われた)で行われます。

社殿の後ろの右側奥に日天(にってん)本来は「うさぎ」社殿左側東、同じく左側奥には月天(がってん)「とり」本殿右側西が祀られている。両方に、各部落から持ち寄った「鳥の的井」が飾られている。

神官は、弓矢的を射ぬくのですが、「魚篩祭り」によるお神酒で酔い、手元が定まらず中々矢が的に当たらないのが可笑しく、大笑いとなる。

的を射ぬくと、射貫いたあと天空に向けて矢をうち、落下してくる矢を、村中の人々が競って取り合います。矢を手中にした部落は豊穰となる。

五穀とは米・麦・粟・豆・黍(きび)、地方によっては、稗(ひえ)や小豆、トウモロコシ等もあります。

**打止**(うちどめ)

## 野々井の白山信仰について

全国に白山神社は二千社あり、石川県の白山比咩神社(しらやまひめじんじや)を総本宮としている社が多く九割以上を占めます。

ご祭神は、菊理媛尊(くくりひめのみこと)、

伊弉諾尊(伊邪那岐命)、伊弉冉尊(伊邪那美命)。

元正天皇の霊亀2年(716)に安久濤(あくど)の淵に遷座して社殿堂塔が造立、養老2年(720)白山開。

白山信仰については、民俗学者の柳田國男や折口信夫が、次のように結論しています。

石川県と岐阜の県境にそびえる峰々である、最高峰2,702mの御前峰(ごぜんみね)、2,677mの剣ヶ峰(けんがみね)、2,684mの大汝峰(おおなんじみね)の白山三峰を中心とした、連峰の総称を「白山」とい、山岳信仰から始まりました。

富士山や立山とともに、日本三霊山のひとつとされる。又、御嶽山を含む日本三大霊山ともいいます。

白山アルペンルートの標高2450mの白山室堂には、奥宮登拝の拠点となる白山比咩(しらやまひめ)神社の祈禱殿(きとうでん)があり、さらに室堂から約40分の御前峰山頂付近に奥宮があります。

昔は女人禁制で修験者しか登れなかった神聖な山でしたが、今は多くの参拝客が訪れています。

修験者泰澄(たいちよう、天武天皇11年6月11日(682/7/20)〜神護景雲元年3月18日(767/4/20))が

白山に登り開山し、修験の道場としたのが、修験者男しか登れない由来とされてきました。

古代朝鮮半島南東部にあった国家、新羅(しら

ぎ、紀元356年〜668年)に由来する信仰で、白頭山信仰を持った高句麗(こうくり)の渡来人が、加賀白山を祀った。という百濟(くだら)を含めた三国時代の歴史により、日本に於ける白山信仰と渡来人による白頭山信仰の両信仰が合併した信仰です。

高句麗姫(こうくりひめ) || 菊理媛(くくりひめ) 白山(しらやま) || 新羅人(しらぎひと)の山

曹洞宗の道元禪師(高祖承陽大師)が宋から帰国する前夜に、白山権現が碧巖録(きがんろく)の写本を助けたとの伝承があります。このことから曹洞宗大本山永平寺は白山権現を永平寺の守護神・鎮守神としており、毎年夏には永平寺の僧侶が白山に参詣して奥宮の前で般若心経を誦読(くしょう)している

江戸時代に浅草新町(被差別部落の中心)で白山神社が祀られたため、関東だけは被差別部落で祀られる神社になった。同和地区といった。しかし、明治の神仏分離政策と廃仏毀釈運動で神社化された。

実は、明治時代に政府が、石川県の白山比咩神社を総本宮と定めた為に、各地の様々な白山信仰が隠され、白山比咩神社から分霊を頂いたという話に書き換えられてしまっているのです。

山岳信仰は密教であったこと、新羅白頭信仰でも

あることは、殆ど伏せられています。

被差別部落については、深追いしない様に…。

## 取手の佐倉道と守谷道、

慶安四年(1657)頃、旧水戸街道取手宿と守谷城大門迄の道を守谷道と呼ぶ様になったと思われます。

理由は佐倉城堀田正盛の領地であった常陸国北條や守谷城、取手が管轄内であったため、その後三代にわたり支配は継がれ寛文七年(1667)迄続きました。領主が変わっても道は残りましたが佐倉道という

道名はいっしか守谷道と言われる様になり、佐倉道の名は取手だけに残った様です。取手市史余録では、佐倉道⇨守谷道と解釈だが、時と共に変化している。

佐倉道は我孫子市中峠で利根川を渡り、八坂神社(取手市民会館)⇨取手本陣裏⇨取手一高前⇨R6を横断して白山通り⇨金刀比羅社鳥居を東へ曲がり常総線を渡り寺原駅方へ⇨青龍神社前で再び踏切を渡り北方向へ、国道294を渡り稲池袋を更に北方の稲戸井駅へと谷津を避けて守谷に至っていました。

大鹿橋が架かったのは、明治始め頃になります。

## 惣代八幡宮、(立寄りません)、「惣代」⇨「総代」

〔祭神〕、誉田別命、大同2年(807)創立。村社、

大同2年京都の石清水八幡宮から守谷町の西林寺二世寛海が勧請したのが始まりとされている。

又、平将門の崇敬をうけたと語り継がれている。のちには守谷城主相馬家の氏神として祀られた。

『寛文朱印留』によると「八幡宮領」として「五石」の朱印地を賜わっていた。

別当は、守谷の西林寺が勤めていました。

明治五年(1872)に村社に列し、明治41年(1908)に第六神社、同44年に浅間神社、大正2年(1913)に鹿島神社、青龍神社、鷲神社、白山神社を合祀したが、昭和22年(1947)にそれぞれ分離独立しています。境内の社殿は、明治以降2度に渡り放火で焼失しており、現在の社殿は平成に再建されています。昭和の時代まで守谷市の飛び地でした。

## 照了学(しょうりょうがく)上人、

天文18年(1549)⇨寛永11年(1634)2月13日

戦国時代後期から江戸時代初期にかけての初期の浄土宗の僧侶。下総国千葉氏重臣高城胤吉の三男。俗名を胤知(たねとも)。

母の大八木氏は側室、正室は主君千葉勝胤の娘でした、武蔵国糶村(千代田区麴町)で生まれた。

幼い頃に家臣の猶子となったが、13歳の頃に父に願い出て小金城城下にあった東漸寺に入山し出家。

和歌や神道などにも通じるなど博識として知られ、天正12年(1584)には東漸寺七世住持となった。

当時の小金城主は甥の高城胤則(たねのり)であり、その保護を受けた。

天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原征伐によって小金城は陥落し、高城胤則も所領を失うが新領主となった徳川家康が浄土宗を信仰していた為、寺領の安堵を受けた。その後、了学は戦乱で荒廃した各地の浄土宗寺院の再建に尽力する常陸国飯沼村(水海

道)の弘経寺を再建し、続いて上総国大多喜城城主本多忠勝の依頼で城下の千葉県大多喜に良信寺(良玄寺)を創建、更に下総国佐倉城城主土井利勝の依頼で城下に松林寺を創建している。

特に本多家では忠勝の孫忠刻の妻となった家康の孫娘千姫(豊臣秀頼未亡人)も含めて家族挙げて了学に帰依し、忠勝が病死した際には遺言により了学が葬儀を行っている。

慶長5年(1600)頃に徳川家康の推挙で紫衣を授かり、家康の要請で度々江戸城や駿府城に於いて講話を行う。

家康の後継者となった徳川秀忠は了学から受戒を受け、病氣平癒の祈祷を行わせる等、深く帰依した。

寛永9年(1632)に秀忠が危篤に陥ると、了学を徳川氏の菩提寺である増上寺の17世貫主に任じ、併せて僧正任命を取り計らった。

秀忠の死後、了学を導師として葬儀が行われた。

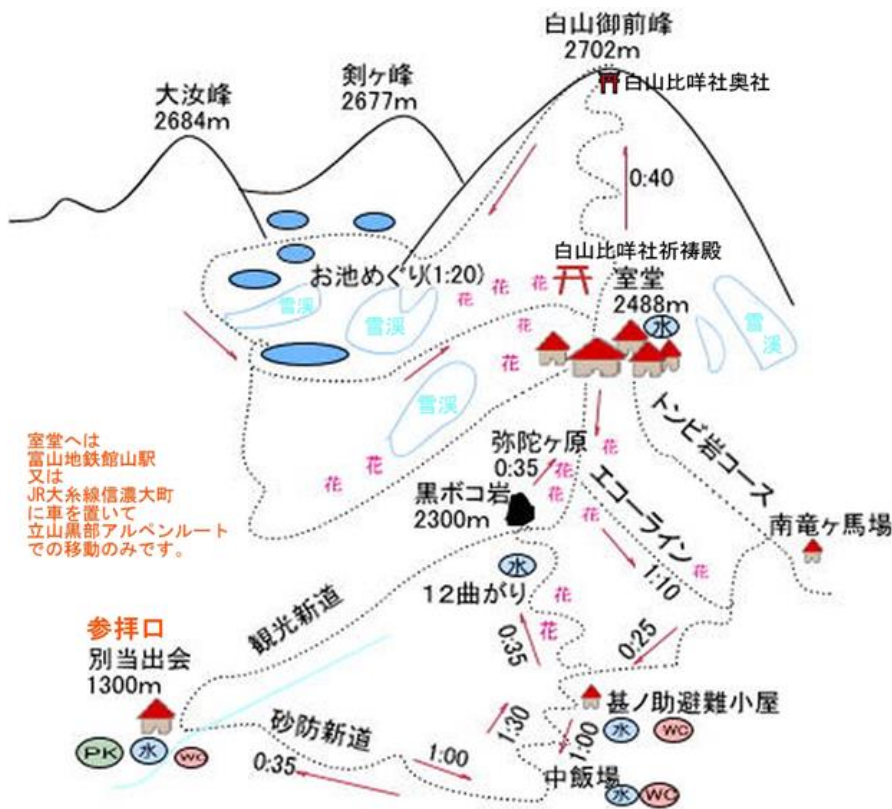
秀忠の葬儀と増上寺の徳川將軍家菩提寺としての整備計画を立てて実施の運びになった事を見届けた同年終わりには徳川家光より与えられた四谷伊賀町の土地に日輪山了学寺(廃寺)を創建してここに隠棲して余生を送ったという。

## 常総線ゆめみ野駅

2011年3月11日14時46分東日本大震災発生。

翌12日、ゆめみ野駅運用開始式典は中止となりました。奇しくも九州新幹線開通日と同日です。

常総線最新駅で、同線では数少ない高架駅です。



室堂へは  
富山地鉄館山駅  
又は  
JR大糸線信濃大町  
に車を置いて  
立山黒部アルペンルート  
での移動のみです。



白山比咩神社(しらやまひめじんじや)の神紋

「三子持亀甲瓜花(みつこもぢきつこうりのはな)」。中心に瓜の花。それを三つの亀甲紋が囲っている。意味は、火(五)と水(六)の融和  
 と思える。白山比咩神社主祭神の菊理媛神はその名  
 のとおり、物事の縁結びを司る神。火(五)と水(六)を  
 括へるという。

白山比咩神社は、立山室堂に奥社と共にあります。

白山祈禱殿参籠殿は室堂ビジターセンター前、

本宮(崇神天皇七年創建)は、白山市三宮町。

観覚光音と相馬霊場年表(簡易版)

| 年代           | 相馬霊場に関する歴史                                                                                   | 備考                   |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|
| 宝永八年元旦(1711) | 観覚光音は、井出三左衛門の三男として生誕                                                                         | JR 小海線海尻駅近傍に生家あり     |
| 享保八年(1723)   | 十三歳の時、浅草の呉服商伊勢屋へ奉公                                                                           |                      |
| 元文五年(1740)   | 常陸国伊奈村豊体の渡辺家再建の為に活躍し、4年後に成功する。取手宿で独立する。                                                      | 江戸人口百万人で世界一の大都市      |
| 寛保二年(1742)   | 利根川大洪水、手賀沼氾濫千間堤破壊。                                                                           |                      |
| 延享二年(1745)   | 取手上町にて穀物類の商売を始め伊勢屋源六と名のる。取手本陣近隣に妻子と暮らす。                                                      | 享保の大飢饉ピークの頃          |
|              | 「六市」と称する月6回の「市」を設け町の繁栄に貢献。市は明治初期迄続けられた。                                                      |                      |
| 宝暦十年(1760)   | 幻堂和尚の法弟となり出家して観覚光音禅師となる。妻に店を譲り縁切り。<br>此の頃から相馬霊場開基の活動が始まったと云われている。宝暦九年説。                      | 田沼意次の新田開発一環で手賀沼開発始まる |
| 宝暦十三年(1763)  | 長禅寺境内の百観音堂を栄螺堂として改築                                                                          | 光音の創案により三世堂と令名。      |
| 安永三年(1774)   | 阿波国霊山寺(りょうぜんじ)より霊場を写す                                                                        | 長禅寺の霊山(れいざん)堂第一番     |
| 安永四年(1775~)  | 四国2回目遍路、栄福寺五十七番から翌年の清滝寺三十五番迄。石柱設置開基説。                                                        |                      |
| 安永五年(~1776)  | 光音自筆の相馬霊場案内本を安永4年秋に出版。札所は既に完成していたといえる。                                                       |                      |
| 安永八年(1779)   | 相馬霊場札所の石柱建立日を取手市史は「札所完成年」としている。<br>相馬霊場の完成は、先達により語り継がれしは、不明で石柱完成年でもない。<br>観覚光音、大鹿に金刀比羅神社を勧進。 | 讚岐の金毘羅大明神の写しです。      |
| 安永九年 (1780)  | 利根川と手賀沼の大洪水、翌年も大洪水                                                                           |                      |
| 天明三年 (1783)  | 浅間山大噴火、利根川手賀沼は洪水となる                                                                          | 下総国相馬でも農作物被害に苦しむ     |
| 同十二月(1783)   | 観覚光音禅師病死、享年七十三                                                                               |                      |
| 文化七年(1810)   | 小林一茶が下総に度々訪れるようになる。                                                                          | 下総の四国巡りやかんこ鳥 一茶      |